＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

伏見地域における

折り紙を通しての交流

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要

１．プロジェクトの名称

「伏見地域における折り紙を通しての交流」

２．プロジェクトの目的

本プロジェクトは、主に現代の折り紙をより多くの人に知ってもらうために企画したプロジェクトである。現代の折り紙とは、現在、愛好家や折り紙作家により次々と作品が発表されている、いわゆるコンプレックス（複雑な）折り紙をはじめとするものである。

本プロジェクトの具体的な目的は、

① 紙を折る楽しさを地域の人（小さい子どもからお年寄りまで）に伝える。

② オリジナル作品の研究と発表。

③ 折り紙を通して学生と地域の人たちの交流を図る。

として、折り紙の普及とオリジナル作品の研究を中心におき、現代の折り紙を知らない人や、折り紙に興味のある人を対象にして、作品を実際に目にする場所、折ってみる機会を提供することとした。

３．代表者および構成員

・代表者

岩佐　悠平	教育学専攻	４回生

・構成員

竹岡　良祐	社会領域専攻	４回生
南　侑樹	英語領域専攻	４回生
中野　誠	音楽領域専攻	３回生
廣田　結	音楽領域専攻	３回生
竹村　詩織	英語領域専攻	２回生
宮側由加里	国語領域専攻	２回生
小西　蒼	美術領域専攻	１回生
杉山　貴俊	教育学専攻	１回生
吉田　瑛里	教育学専攻	１回生

４．助言教員

村上　登司文先生（教育学科）

第２章　内容や実施経過

本プロジェクトの主な取り組みとして

①学生による折り紙ワークショップ

②講師の方による折り紙ワークショップ

③折り紙作品の展示

を行った。

１．学生による折り紙ワークショップ

（１）告知方法

京都教育大学附属桃山小学校、中学校にワークショップの日程を記載したチラシを、各教室に１枚ずつ貼って頂いた。また、附属桃山小学校の英語の先生に興味を持ってもらえたため、英語の教室に折り紙の作品を置いてもらうことができた。

大学内へは、留学生を対象に学生課内の掲示板にチラシを貼らせてもらった。

（２）ワークショップの日程

10 月 30 日、11 月 3 日、11 月 20 日、11 月 27 日、12 月 11 日、12 月 18 日の計 6 回実施した。時間は、毎回 13：00～17：00 までの 4 時間行っていた。

参加者は毎回４名ほど、参加してもらえた。人数は少なかったが、一度参加した人は毎回参加してくれていた。

２．講師の方による折り紙ワークショップ

「講師の方による折り紙ワークショップ」では、折り紙作家として活躍されている西田シャトナーさんを講師としてお招きすることができた。西田さんは、日本の折り紙界屈指の仕上げ技法を持つ折り紙作家として知られている。

（1）告知方法

「学生による折り紙ワークショップ」のチラシの中に、詳細を記載し、附属桃山小学校と中学校の各クラスの教室に貼って頂いた。留学生向けのチラシにも情報を記載して学生課内の掲示板に貼らせてもらった。

また、藤陵祭のパンフレットにも情報を記載し、当日は大学構内に情報を記載した立て看板を設置した。

さらにインターネット上で、講師の方自身のブログ、ツイッターで情報を告知して頂いた。

（2）ワークショップの日程

11 月 13 日に実施。時間帯は①10：00～12：00、②13：00～15：00、③15：30～17：30 の 3 回開催した。

合計 63 人の方に、参加して頂いた。参加者の年齢は、3 歳くらいの子供から、70 歳くらいの方までの幅広い年代の方に楽しんで頂けた。

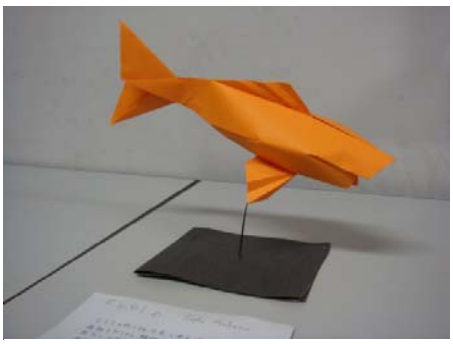
（西田シャトナーさん　作品）

３．折り紙作品の展示

（1）藤陵祭期間中の折り紙の展示

11 月 11 日、12 日、13 日の 3 日間折り紙の展示を行った。

現代折り紙の特徴である立体感を持った作品を中心に展示し、また構成員によるオリジナル作品の展示も行った。



（展示作品の一部）

（展示作品の一部）

たまたま通りがかった人、藤陵祭のパンフレットを見て興味を持ち見に来た人、ワークショップの参加者など、3 日間で約 100 人の人が展示を見に来てくださった。

（展示作品の一部）

（構成員によるオリジナル作品）

第３章　結果や成果

１．学生による折り紙ワークショップ

学生による折り紙ワークショップは、参加者の人数が少ないものの、参加者一人当たりへのきめの細かい対応が可能となっているため、参加者の高い満足感につながっていた。第一回目から継続して参加している参加者は、実際にかなり複雑な作品が折れるようになってきていた。

参加者の人数が少ないこと、継続しての参加者が多いことを生かして、回を重ねるごとにワークショップの内容を変えていくことができた。最初の４回のワークショップは、参加者と一緒に折り紙を折るという内容であったが、後半の２回では折る作品に合った紙の制作、糊を使った長期保存を考えた仕上げ技法についてのワークショップを行うことができた。

紙の制作では、白い用紙にマーブリングという技法を用いて模様をつけていった。このマーブリングは、参加者の小学生、大学生に大変好評であった。この用紙を使って折った作品は、市販の紙で折ったものとは違う雰囲気をもつものとなった。

糊を用いた仕上げ技法の回では、CMC 糊と呼ばれる糊を用いた。白い粉末状の糊である CMC 糊を水で薄め、折りあがった作品に塗っていく。作品が糊を吸い、へなへなになってから、ドライヤーで乾かしながら作品のかたちを整えていくという手法を用いた。この手法は、小学生の参加者にとっては難しかったようだが、興味を持って取り組んでいた。

２．講師の方による折り紙ワークショップ

西田シャトナーさんによる折り紙ワークショップは、藤陵祭に合わせて開催した。そのため、大々的に広報活動を行ったわけではなかったのに、60 人を超える人に参加していただくことができた。西田さんが、自身の作品を持ってきてくれたため、参加者は驚きをもって、現在の折り紙を目にしていた。

（西田シャトナーさん　作品）

また、この藤陵祭での西田さんのワークショップで知り合った他大学の学生が、学生による折り紙ワークショップのスタッフとして一緒に活動するなど、他大学の学生とのつながりも生まれた。

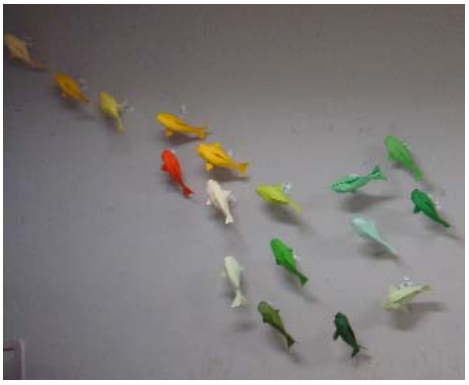
西田さんのワークショップでは、普段、構成員の学生が行っている折り紙ワークショップとは違い、幅広い年代の方に折り紙を楽しんでもらうことができた。

３．折り紙作品の展示

折り紙作品の展示は、藤陵祭期間中の三日間行った。

（展示作品の一部）

机の上での展示とは別に、展示教室の壁を利用しての展示は、訪れた人から好評を得ることができた。壁を利用した展示作品を含めると、展示作品数は約 60 作品に及んだ。



（壁を使った展示の準備段階）

展示会場では、展示を見て折り紙に興味をもった人と話をし、折ってみたいという人とは一緒に折り紙を折ることができた。

４．成果

学生による折り紙ワークショップ、西田さんによる折り紙ワークショップ、折り紙作品の展示を通して、現代の折り紙がどのようなものか、参加者に伝えることができたと考えている。

また、本プロジェクト実施中に、構成員が日本折紙協会講師資格を取得し、オリジナル作品が日本折紙学会発行の雑誌『折紙探偵団』にかすかに掲載されるなど、構成員自体の折り紙作品の研究も少しずつではあるが進んでいる。

第４章　まとめや反省、今後の展望

１．まとめ

学生による折り紙ワークショップ、藤陵祭での展示、西田さんの折り紙ワークショップで延べ 100 人以上もの人に、現代折り紙を目にしてもらうことができた。折り紙が、ツルや紙飛行機だけではなく、身近でありながら、奥の深い造形美術の１つであることを感じてもらえたのではないかと考えている。少なくとも今回のプロジェクトで現代折り紙を知ってもらう機会を作ることはできたと感じている。

学生による折り紙ワークショップでは、参加者に構成員の持つ折り紙の技術の大半を伝えることができたと考えている。あとは、各自でその技術を応用、発展させていってほしいと願っている。

西田さんによるワークショップでは、より折り紙の芸術性を参加者に感じてもらうことができたのではないかと思っている。また、折り紙が単に子どもの遊びではなく、世界中に広まり、さまざまな作品が発表されている、その理由を少しでも多くの人に感じてもらえたのではないかとも感じている。

（西田シャトナーさん　作品）

折り紙作品の展示では、折り紙が平面的な作品でなく、むしろ立体的な作品のほうが多くつくられていることを知ってもらえたと考えている。展示作品の中で興味のある作品を、一緒に折ることができる場所を提供できたことにも手ごたえを感じている。

本プロジェクトのどの企画も、参加者から高い評価を得ることができた。そのため、本プロジェクトの目的に挙げた

① 紙を折る楽しさを地域の人(小さい子どもからお年寄りまで)に伝える。
② オリジナル作品の研究と発表。
③ 折り紙を通して学生と地域の人たちの交流を図る。

の三点のうち、①と②に関しては、おおよそ

の目的を達成することはできたと考えている。

２．反省

広報活動をより積極的に行えば、より多くの人に折り紙にふれてもらうことができたのではないかと感じている。特に「学生による折り紙ワークショップ」は、参加者が増えても活動に支障はないと思われる。広報活動の範囲、方法を工夫することでより多くの参加者を期待できる。

また、構成メンバーが折り紙技術をさらに向上することができれば、もっと多様なオリジナル作品が生まれてきていたと考えられるし、オリジナル作品が多数生まれてくれば、著作権の問題を気にせず、柔軟な活動(折り図を掲載した冊子の作成、配布など)が可能になってくるものと思われる。

折り紙作品の展示は、準備をもっと事前から行っていれば、ジオラマのような大がかりなセットを作ることができた。展示会場を埋め尽くすほどの折り紙作品の展示ができれば、訪れた人により興味を持ってもらえたと思う。

本プロジェクトの目的③として、「折り紙を通して学生と地域の人たちの交流を図る。」を挙げていた。しかし、主な活動が大学を会場とした学生による折り紙ワークショップのみであったため、活動が狭められていたと思う。折り紙を通してボランティア活動を行っている「京都学生折り紙サークル」のように、各地のイベントに訪れ折り紙ワークショップを行うと、より多くの人と折り紙を通した交流ができるのではないか。この企画も構成員それぞれの折り紙技術の向上、広報活動に力を注げば十分に可能となる。

３．今後の展望

学生による折り紙ワークショップは、参加者からの要望により、当初の予定を変更して12月中に2回追加した。参加者から高評価を得てワークショップの回数が増えたことから、今後同様の企画を行っても、ある一定量の需要は見込めると考えられる。

今回、藤陵祭で折り紙作品の展示と講師による折り紙ワークショップを開催した。この折り紙の展示とワークショップを数年にわたり藤陵祭で行えば、藤陵祭での一つのメインイベントにまで成長させることもできるのではないか。京都教育大学近辺の人たちに、京教の学園祭では、折り紙の展示、ワークショップがあるという認識が広がれば、より多くの人に現代の折り紙を知ってもらうことができると思われる。

また、京都教育大学は教員養成大学であるため、学内の学生を対象に折り紙ワークショップを行えば、教育実習や実際に教員として働く際に生徒とのコミュニケーションをとる１つの手段として折り紙を用いることができるのではないかと考えている。

東京大学には、現代の折り紙の普及と発展を目的にした「Orist」というサークルがある。このサークルは、設立から４年目でメディアにも多数取り上げられ、本も２冊出版するまでに至っている。本プロジェクトも、今回の反省点を活かし、教育大学としての特長を引き出した活動を続けていけば、「Orist」のような特色ある活動へと発展することが期待できる。

（構成員によるオリジナル作品）